



「下村満子の生き方塾」ニュース

Vol.02 2016.06

—5月勉強会特集号— (5月28日、二本松市民交流センター)



新体制による運営

「下村満子の生き方塾」の5月勉強会は5月28日、福島県二本松市の市民交流センターで開かれました。

下村塾長が6年目に入った「生き方塾」の在り方、新しい体制による運営などについて話し、午後からは開塾から2年半ほど副塾長を務めた志村史夫先生が「木を食べる」と題して応援団講義を行いました。その後2月に放映されたNHKスペシャル「司馬遼太郎の『この国のかたち』後編」のDVDを見た後、塾長が「日本人の心と、ものの考え方」をテーマに講話をしました。この中で塾長は、2011年3月の大震災の際、アメリカの「友だち作戦」の一環として救援活動にあたったアメリカ海兵隊や海軍の兵士が被ばくの後遺症に苦しんでいる実態を、小泉元首相の現地視察を基に触れ、今度は日本人がお返しをしなければならない、と訴えました。「夜遊び学」は織井塾生の「ドリーム」で行い、他にお客さんがいなかったことから、いつになく盛り上がり、昼とは違った観点での自由闊達な話が飛び交いました。

●塾生の、塾生による、塾生のための「生き方塾」

恒例の10分間坐禅の後、下村塾長は次のように「生き方塾」の在り方や、世話人制度を柱とした新体制などについて話し、塾生に理解と協力を求めました。

「下村満子の生き方塾」は東日本大震災1カ月後の2011年4月16日に開塾し、4月から6年目の第Ⅶ期に入りました。5年という大きな節目を通過し、今期から新しいステージを迎えました。「生き方塾」は、開塾から3年間は「福島から全国、全世界へ発信」を掲げて、毎月1回勉強会を福島で行い、4年目、5年目は福島と東京の2会場で交互に勉強会を続けてきました。「日本の復興は日本人の心の再生から」という開塾の理念は何ら変わっておりません。

私は昨年春ぐらゐから急に目が不自由になり、秋にはこのままでは失明してしまう、と宣告されました。ジャーナリストにとって目は命ですから、一時は失明したら生きていても…とまで思いつめました。が、「まだ来ない明日のことをくよくよ思い悩んでも仕方ありません」と常日頃「生き方塾」で皆さんに語っているのに、このざまは何だ、と思い返しました。12月、東京逡信病院に入院したところ、名医と評判が高い先生に出会い、成功率1、2割りと言われ、覚悟して手術を受けました。ところが、奇跡が起こり失明の危機からは逃れることができました。しかし、9割方失明と言われた目ですから、今でも完全に回復してはいません。不自由な生活が続いています。おそらく完全回復は難しいでしょう。

5年というひとつの区切りもついたし、目の具合も悪いことから、一時は「生き方塾」には終止符を打とうかな、とも考えました。しかし、「もっと学びたい」「5年も続いた塾は、もはや塾長一人のものではない」といった塾生の声があり、さらに私にとっても、塾生は自分の家族のように思えてなりません。こうしたことから、「生き方塾」は第Ⅶ期をスタートさせました。

開塾6年目というターニングポイントを迎えるにあたり、「生き方塾」の在り方について、私なりに考え、また三田事務局局長や塾生の有志と、いろいろ話し合ってきました。これまでの「生き方塾」は、開塾時に私が申し上げた「できることは自分たちでやる」とは逆に、「事務局依存体質」、事務局に「おんぶにだっこ」の状態でした。この結果、事務局の負担は大

きくなるばかりでいた。一方、5年の間に、塾生たちの人間力は大きく成長し、「出来ることは



自分たちでやる」という「生き方塾」の精神の原点を目指すということで意見の一致を見ました。その中心となるのは、世話人制度であり、世話人は塾長である私と事務局と情報を共有し、連絡を密にしながら塾運営の仕事を行います。

このほか、学校への「出前塾」も始めます。これは、若い人にこそ、「命とは何か」「生きるとは何か」を考えてもらいたいという私の強い思いが一つの形となったものです。

第一回目は、7月7日に会津若松のザベリオ学園中・高全生徒、保護者、先生方の計600名を対象に、行うことになりました。9月30日(金)には、福島市にある有朋高等学院で第二回の「出前塾」を行うことが決まっています。10月には、ザベリオ学園の郡山にある、小・中学校の生徒と保護者を対象に行う予定です。

新しい体制の方向性とめざすところは、箇条書き的に言えば、以下になるでしょう。

①事務局の負担軽減を担う世話人制度を設け、塾運営の仕事事務局とコラボする。塾長は下村、事務局局長は三田という軸は変えず、事務局も引き続き三田局長の株式会社コアに置く。事務局を変えないのは、5年間に蓄積された塾運営のノウハウがあるから

②世話人は、福島と東京に4、5人程度置き、それぞれの代表を代表世話人とする。代表世話人は塾長との連携を密にして、勉強会を福島で開く際は福島の世話人が、東京で開く際には東京の世話人が、開催の案内、塾長が日程などの直接交渉して決めた応援団講師とのその後の細かいつめ、送迎、当日の諸事などを担当する。手薄になっていた応援団へのフォローにも気を配る。講師への礼状、書籍・著書の手配なども担う。

③塾生増強が緊急の課題であり、応援団やOG・OBへ塾の活動状況や毎月の勉強会を、「ニュースレター」のようなメルマガスタイルで情報を発信する。また、入塾説明会を福島と東京で

開催する。

- ④オブザーバー参加も認め、入塾希望者の「お試し生き方塾」とする
- ⑤今はホームページよりはスマホ、ツイッター、ラインなどのソーシャルネットワークが重宝されているので、それができる人材を発掘し、若い人向けの発信方法を考える。
- ⑥「出前塾」には塾生も同行し、塾の素晴らしさを訴える。出前

●「志村節」が炸裂

午後からの応援団講義には2年半ほど副塾長を務めた志村史夫先生が登場し、「木を食べる」と題し、以前と同じように歯切れよい講義を披露しました。日本人は、自然との共生もできる民族です。先生は「ガキの好奇心」の視点で、木の偉さに注目しました。シアトルのコンクリートと鉄骨でできたスタジアムが、完成後たった30年で老朽化して取り壊され、一方1400年前に建てられた木造の法隆寺は凜として立っている。このような木の偉さ、木が持つ様々な潜在的な能力を引き出し、食材に使うなどといった風に用途を広げていけば、それは日本の林業の再生につながり、日本は緑がきれいな国によみがえると、志村先生は強調しました。ゴミとして邪魔物扱いされている間伐材のおがくずをパウダーにして食材に使っていけ

●「名こそ惜しけれ」

塾長講話の前に、3月の第Ⅵ期最後の勉強会で上映されたNHKスペシャル司馬遼太郎の「この国のかたち」の後編DVDを見ました。前編では「辺境の島国」という立地が日本文化をどう形作ったかに焦点が当てられていました。多様な価値観を受け入れる「無思想の思想」、外への「好奇心」が日本人の奥底にあることが強調されました。

では後編の骨子はどうか。次のようになるでしょう。

一司馬さんが注目したのは「武士」であり、特に鎌倉時代の武士が育んだ、私利私欲を恥とする「名こそ惜しけれ」の精神だった。それは武家政権が拡大する中で、全国に浸透し、江戸時代には広く下級武士のモラルとして定着したという。江戸時代末期、司馬さんが「人間の芸術品」とまで語った志士たちが、この精神を最大限に発揮して維新を実現させた。明治時代に武士が消滅しても、700年の遺産は「痛々しいほど清潔に」近代産業の育成に努めた明治国家を生み出す原動力となった。それが続く昭和の世に何をもちたらし、どのように現代日本人へと受け継がれたのか。「名こそ惜しけれ、恥ずかしいことをするな」という独自の考え方、行動は、グローバルリズム礼賛の中で忘れ去られようとしているけれど、これこそが世界に通じる価値観であることに間違いはない。

DVD上映に続いて下村塾長が講話しました。以下のように要約します。

≪如何でしたか。3月に島国に焦点を当てた前編を見て、今日は武士の精神をテーマにした後編を見ました。この数日間にいろいろな出来事がありましたね。伊勢志摩サミットが終わり、出席したオバマ・アメリカ大統領が、現職大統領として初めて劇的な広島訪問を行いました。2回にわたって「この

塾の活動を、側面から援助する「生き方塾未来基金」を設ける
塾長がこうした考えが示した、世話人が、「塾生みんなの協力を得ながら、円満かつ円滑な塾運営に貢献したい。それが塾長、事務局の負担軽減につながる」などと、あいさつしました。リンカーンの「人民の、人民による、人民のための政府」ではないが、今後の塾運営は塾生参画方式で行う、ということです。



ば、体質改善に役立つほかに、ダイエットにも大きな効果をもたらす。これらは、常識的な学者は決して気づくことではなかった、とも話しました。

杉の間伐材から出るおがくずを、細かなパウダーにしてお茶と混ぜた「オガッティー」を飲んだら、7割の花粉症患者が、症状が軽くなったという例も示しました。「木を食べる」という常識では考えられない思考が、外食産業や料理の世界に浸透し、食生活の改善に一役買うことを願ってしまいます。講義の最後に先生は、二羽のフクロウが写っている一枚の写真を示しながら、「好奇心があるかどうかで、人生は決まる」という落ちが、とても面白く大受けしていました。

国のかたち」を、DVDを通して考えましたが、実にいいタイミングだと思えます。

司馬さんは武士の心を支えた「名こそ惜しけれ」、恥ずかしい行いはするな、という矜持を高く評価し、この行動規範は広く日本人のDNAの隅々に行きわたっている、と誇りにしています。明治維新の時には、様々な指導者たちが命を落としましたが、それぞれが日本を良くしよう、何とかしようと思ひ、命や身を捨てて頑張ったのは事実です。当時の指導層には私心を捨てた「公」の意識が根底にあったわけですが、今日の日本の指導層にはそれとは真逆です。

東京都民として、舛添知事の今回の公私混同には呆れるばかりです。世界を代表する東京の顔である知事が、パンツやパジャマ、マンガ本まで政治資金で買っていたのですから、恥ずかしいというか、「名こそ惜しけれ」とは対極にあります。私がいつも言っている「魚は頭から腐る」の典型です。日本の国が辛うじて持ちこたえているのは、東大などの一流大学を出た頭のいい官僚や政治指導層ではなく、名もない人々が、毎日一生懸命真面目に働き、必死に生きているからです。司馬さんが亡くなって20年の節目でこの番組は制作されたようですが、最後に司馬さんが発した言葉、「私も日本社会は、武士道を土台にして、その「義務」（公の意識）を育てたつもりでいた。しかし、日本の近代史は、必ずしもそれが十分であったとは、とても思えない。今こそ、それをもっと強く持ち直して、さらに豊かな倫理に仕上げ、世界に対する日本人の姿勢を、新しいあり方の基本にすべきではないか」には、今の日本を予感し何とかしなければならぬ、というメッセージが込められていますね。

ここで、DVDを見た皆さんの感想を聞きたいのですが…。

【富永塾生】「公」の意識は恩義がある人への、何かをしようという意識から生まれた、と司馬さんは言いました。塾長は「魚は頭から腐る」と言って、日本の指導層が「公」の意識を失って、私利私欲に走っている、おかしくなっていることを指摘しました。そこで思うことは、おかしい指導層によって日本がおかしくなり、だからそこに住む日本人がおかしくなったのか、ということなのです。

【下村】まさに私が「生き方塾」をやむにやまれず始めた原点はそこにあります。国が変わらないと、私たちも変わらないではなく、私たちが変われば国も変わるという視点



で、「生き方塾」は始まりました。首相や官僚、政治家といった指導層に頼るのではなく、自分で自分の道を切り開いていく。「魚は頭から腐る」からです。舛添さんほどひどくなくても、多くの政治家たちは、ザル法で抜け道だらけの政治資金規正法を利用して、違法ではないけれども、国民の税金を不適切と言われようと平気で個人的に勝手な使い方をしていきます。道義的には許されなくても、法律上は家族旅行だって可能です。しかし、常識的には「名こそ惜しけれ」と、そんな恥ずかしいことはしないもの。「違法ではない」と居直ることができるのは、政治家たちが作った法律が、「ザル法」と言われるように、自分たちに都合の良いものだからです。不正を防ぐには、私たちが厳しく監視しなければなりません。政治資金報告書は誰でも見るすることができます。

経済同友会の副代表幹事をしていた時、私は日本の経済界の代表たちと、イギリスの議会制度の実態調査に出かけました。イギリスでは、政治資金は国民の税金から出されるお金だからと、タクシー代の領収書まで添付しなければなりません。それもいつ、どこからどこまで、何の目的で乗りました、と書かなければなりません。それを国民は情報公開によって、誰でも見るすることができます。国民の税金を使うのですから、それが当たり前です。私たちが変わっていった、そうした不正は許さないという強い姿勢を見せない限り、政治家たちは変わりません。私一人が変わったところで、と諦めてしまっただけではいけません。今度の参院選から、18歳以上が投票権を持ちます。18歳以上にしたのは、私が思うには、若い人ほど政治に対し無知で保守的だから、自民党に投票するだろうという読みがあるからでしょう。つまり、選挙という制度を使って、個々人が意思表示することが大切なのです。≫

【会田塾生】あらためて日本という国は素晴らしい伝統を持つ国だと感じました。しかし、どんなに素晴らしい場所があっても、指導層のほんの少しの間違いが、全体をとんでもないひどい方向にもっていくということを、国民はきちんと認識しなければいけないこと、そして自分たちは政治を変える力を持っていることを認識しなければいけないことを強く感じました。

【下村】先の戦争は「統帥権」という天皇が持つ特権を、軍部が乗っ取って行いました。天皇の名の下に、好き勝手に戦争

を進め、敗北し、私は命からがら満州(現中国東北部)から引き揚げてきました。引き揚げ船内では、栄養失調で体力を失った多くの日本人たちが亡くなり、死体を海に投げ捨てられた現場を目撃しました。敗戦近くなって、陸軍や海軍の指導者たちは「この戦争には勝てない」と分かっていたが、止められませんでした。三菱自動車も不正を分かっていたけれども止められなかったと同じです。それを言うと、自分が責任を取られるからです。間違っていたのなら、直ちに謝ること。それこそが「名こそ惜しけれ」なのです。

日本が間違った戦争をしなければ、原爆は投下されなかったと思うし、また日本も朝鮮半島や中国、東南アジアでひどいことをやってきました。広島でのオバマさんのメッセージは、謝罪するかどうかなどといった些少なことを乗り越えた素晴らしいメッセージだったと思います。

今、安倍内閣は、歴代の内閣法制局長や憲法学者が、安保法制は憲法の拡大解釈であり違法だ、と言っているのに、国民からは抗議の声が少ししか聞こえません。かつての不幸な戦争がまた起きる可能性は否定できないのです。こういったことがあるから、7月の勉強会では憲法について考えます。今は9条ばかり議論されていますが、安倍内閣は、緊急事態条項といって、首相が緊急事態と発令すると、総理大臣が何でも決められるという法律を作ろうとしています。これはいつでもヒトラーになれるという怖いものですが、日本人の多くはこのことに無関心ですし、第一このことも知らない人が多いです。一夜にして自由が束縛されてしまう緊急事態法とは一体何なのか、しっかり勉強しないと、気づいたらとんでもない世の中になっていた、ということになってしまいます。だから、ろくでもない候補者しか出ていなくても、「よりました」候補を見定め、必ず選挙に行くことが大切です。投票に行かない人に、自分の国の政治や政治家を批判する権利はありません。

【伊東塾生】「公」の意識、義務、権利、統帥権。日露戦争に日本が勝ったのに、賠償金を得られず暴動が起きた。それがきっかけとなって日本は危うい方向に向かうようになったという司馬さんの指摘は新鮮です。「公」、権利、義務。どれを行動の際の指針として選ぶかによって、行動は大きく変わらと思うのですが。

【下村】権利の主張は、日露戦争が終わってから特に強くなり、義務の意識が薄れていったという司馬さんの主張でしたが、その傾向は第二次大戦後ますます濃厚になってきたと思います。戦後の民主主義ですが、勝ち取ったものではないから、子どもに「何をしようオレの自由だろう」と主張され、何の反論もできない親が増えていきます。でも、自由というのは、義務と権利のように、その背景には相手の自由も尊重するということが大前提です。相手の尊厳や自由を踏みつけた自由はあり得ません。相手の自由と自分の自由とがぶつかった時、どういう風に折り合いをつけるのか。

人間は一人で生きているわけではありません。人は社会の中で、いろんな方のお世話になって生き、生かされている。水は水道局の人がつくり、お昼の弁当だって調理する人がいるから、あるいはお米や野菜を作る農家の方がいるから食べら

れるのです。ゴミを処理する人がいるから、街の美化が保たれているのです。世の中の職業には貴賤がなく、すべての職業は、それは人が生きていく上に必要だからあるのです。そういう人のお蔭によって生きていくことができるのなら、逆に私たちは、自分に出来ることで社会に貢献しなければなりません。

●戦前と同じムードだ

先の戦争に入った原因の一つには、余計なことは言わない方がいい、という自主規制があったことは事実です。ところが今はどうか。おかしいと感じていてもメディアは、権力側の圧力に過剰反応して報道しない。それに対して私は強く危機感をもっています。今の時代が、日本が何となく戦争に入ってしまった昭和の初めに思われて仕方ないのです。自分を守るためには何も言わない方がいい。強い者の側についての方が安全、そんなムードなのです。幸い日本には選挙という民主主義のベースを支える制度がありますから、市民一人ひとりが自分の意思表示をすべきです。選挙の時にだけ有権者に媚びる政治家に騙されないで、候補者の資質や政党の政策を見極めて1票を投じることです。

日本人は世界で一番エゴが少ない民族だと思っています。そして木を食べる話が先程あったように、自然との共生もできる民族です。さらに日本人は謙虚であり、自分は大自然の一部であると認識している民族でもあります。欧米の方々は日本人とは逆に、自然を支配しようとする、支配できると考える傾向にあります。人間こそが地球上で一番の主人公と考える人が多いです。私は両方の考え方が必要だと考えていますが、今は欧米の思考法が主役だから、アジア的な考え方にもっと光を当てなければいけないと思っています。新しい世紀は、西洋とアジアのバランスが取れた時代だと信じています。「生き方塾」では、モノ中心の20世紀型ではなく、目に見えないものごとに価値を置く21世紀型の価値観を尊重します。これからはモノやカネに重点を置く拝金主義から、幸せ感、充実感、感激感、愛、感謝、喜び、心の平安、健康、といったお金や数値では計れない価値を尊ぶ時代が来るとと思っています。

ところで、オバマ大統領が広島を訪ねたことに対しては、日本人の間でも謝罪がなかったとか、いろいろな言い分はあるようですが、私は、今回、それは謝罪すれば、ベストだったかも知れませんが、あそこで謝罪したとかしないとかいうこ

●トモダチ作戦の後遺症

昨日5月27日、自然エネルギー財団が主催する講演会が東京で開かれました。2年前の2014年2月の都知事選では、原発廃止を掲げた細川護熙さんが小泉純一郎さんと二人三脚を組んで、舛添さんと争いましたが、残念ながら敗れてしまいました。知事選後、原発ではなく、自然エネルギーこそがエネルギー問題の最終解決法だとして、財団を発足させました。今は協議会と名を変え、外国から著名な学者や研究者らを招いて定期的にシンポジウムや講演会を開いています。私も賛同人の一人に名を連ねています。それで先日の

職業も社会貢献の一つです。自己主張をするだけでなく、市民の一人として、義務を果たすことも必要です。ポイントはそのバランスです。「公」ばかりに重点を置くと、自分の考えを示した時、かつてのように「非国民」呼ばわりをされてしまいます。

とを言うのは、非常にケチくさいと思います。原爆は彼が落としたものではなく、たまたま彼は今回、大統領として日本にやって来た。オバマさんでなかったら、現職大統領が広島を訪れることはなかったと思います。彼は間もなく任期を終え、次の選挙の心配はないし、核廃絶を訴えてノーベル平和賞をもらったことから強く望んでいた広島訪問という思いを実行したのだと思います。恐らくはアメリカ政府、ことに退役軍人たちは訪問反対の声も強かったと思うのですが、彼が最終決断して訪問が実現したのでしょうか。現職大統領が原爆投下から71年経って初めて来た意義は大きいのです。

被爆者とは会わないと言っていたけれど、彼は被爆者を抱きしめて話を聞きました。その光景をテレビで見て、私は思わず涙がこぼれました。キャロライン・ケネディ駐日大使の働きが大きかった、と私はきいています。オバマと会った被爆者たちの晴れやかな笑顔を見て、私は涙を流したのです。彼らは、理屈抜きに、救われたのです。アメリカの反応ですが、アメリカは原爆投下を、戦争を早く終わらせたのだと、原爆投下は正当化しています。原爆を投下しなかったら、日本本土決戦になってさらに何百万人もの死者が出たであろうし、より多くのアメリカ兵の死者も出たであろう、と主張しています。原爆投下は間違っていた、とは言えないことは、計7年間アメリカにいた私にはよく分かります。でも、アメリカのオバマさんの広島訪問については、そうしたアメリカでも、とてもいい反応が目立ちます。対日強硬派の退役軍人、捕虜になった元兵士たちも、さほど悪い評価はしていません。アメリカの新聞はオバマが広島を訪問したのだから、12月8日には安倍首相がパールハーバーに行き、首相として戦死者を弔問すべきだと書いています。それは当然だと思えます。日米の戦争は日本がパールハーバーを宣戦布告しないまま攻撃したのですから。だから原爆を落としたアメリカは悪い、などと一方的に責めても意味がないのです。

講演会のゲストは、郵政民営化の時のような勢いで、「原発ゼロ社会」と叫んで頑張っている小泉さんでした。

小泉さんは、2011年3月の東日本大震災の際、アメリカ軍が行った「トモダチ作戦」で多くの犠牲者が出ていることに焦点を絞り、話しました。

健康被害という犠牲に対しては、日本政府も、東電も知らないふりをしているとこと、怒りを持ち、何とかしなければ、と頑張っています。

小泉さんはトモダチ作戦に参加した海兵隊員や海軍の兵士たちが、原発事故で放出された放射能の直撃を受けて、今そ

れが原因と思われるひどい健康被害で苦しんでいることを、今年3月に知りました。それで、小泉さんは、5月中旬アメリカに飛び、健康被害に苦しむ兵士たちに面談してきたのです。

「トモダチ作戦」は米軍による大震災の救援活動で、アメリカ政府と軍は韓国に向かう予定だった空母ロナルドレーガンを急遽、福島県の80*₀沖に派遣しました。海軍や海兵隊兵士がヘリコプターに乗って、3月12日から2カ月ほど、行方不明者捜索や救援物資輸送、放射能測定などに当たりました。原子炉がメルトダウンした時は、強い西風が吹いていたから、高線量の放射能が空母やその周辺に押し寄せてきました。作戦には延べで2万人の兵士が参加し、放射能の防護服などは着ないで、普通の格好で作業に当たりました。空母艦内では海水を取り込んで真水にして利用していますが、真水にする過程で放射能は除去できませんから、放射能汚染の水を飲料水とし、料理やシャワーにも使う。除染のために浴びるシャワー自体が放射の汚染水で、食事も放射能汚染です。内部、外部被ばくのダブルパンチですから、健康被害はいわば必然でしょう。

作戦終了後しばらくの間は何ら問題はなかったのですが、3年程前から鼻血を出したり、下痢をしたり、原因不明の体調不良に苦しむ兵士たちが出てきました。軍の病院に行っても、原因不明としか言われぬ。海兵隊員は屈強な人が多いのですが、そんな彼らが苦しむ。彼らは徐々に弱っていき除隊を余儀なくされるので、収入源を失い、病院に行く費用にもこと欠く状態になっている。アメリカは医療費が高く、国民皆保険ではないから、医者にも行けない。健康被害に苦しむ元兵士たちは、空母の母港のカリフォルニア・サンジェゴの連邦地裁に、東電やGEを相手取り、損害賠償請求の訴訟を起こしました。はじめ8人だった原告はいま四百人にもなっています。既に7人も亡くなっているのに、東電は裁判を日本でやるのかアメリカでやるのかを争い、時間稼ぎをしています。

こうした話を聞いて小泉さんは5月、アメリカに行き、兵士たちと直接面談したわけです。そこで新たに分かったことはアメリカ政府やアメリカ軍共に原発事故と因果関係を認めず、自国兵士の救済に動こうとしない実態です。さらに日本の外務省の北米局長は、空母が除染のために横須賀や韓国に寄港しようとしたら、拒否されたことも知らない。そして法的には日本政府は何もできないと言い放ったという。で、小

泉さんが、兵士たちに何か言いたいことがあるかと聞くと、彼らは一切恨みがましいことは言わず、「病気になったけど、それでも日本が好きです」と返事したり、日本に行ったことを悔やんでいないのかと聞くと、「全力で任務にあただけです」と答える。一切、愚痴も恨みつらみも言わない彼らの姿に感動した小泉さんは、記者会見の席で、思わず号泣しました。

小泉さんは言いました。「アメリカ海軍は因果関係を認めないし、アメリカ政府も同盟国の日本政府に文句を言わない。日米のマスコミも報道しない。だから俺も知らなかったし、国民も知らない。日本のために尽してくれた人が苦しんでいるのを見て見ぬふりはできません」。小泉さんは福島での「友だち作戦」で放射能汚染を受け、病気になり苦しむアメリカの兵士を救うための〈基金〉を発足させようと言いました。

小泉さんの言う通り、これは人道問題です。メディアはオバマ大統領の広島訪問を大きく報道しているが、第一原発の事故で放射能被害に遭った米軍兵士の苦しみは報道しない。これが現実なのです。オバマさんは「今日の広島が核廃絶のスタートライン」と言い、それに対して謝罪がないのはおかしいという人も言いますが、謝罪して解決できるものではありません。現実、核は減っていません。原発は安くてグリーンなエネルギーと現政府は言っているけれども、小泉さんは「外国の人たちが善意でやってきたことで大変な目に遭っている。こんな不条理がまかり通っているのか」と言います。核兵器は悪いけれど、原発はいい。こんなことは許されぬと思います。

今朝の新聞ではオバマさんは原爆資料館に行く予定はなく、しかも被爆者と会う予定もなかった。しかし、彼は予定外ことをきっちりやって、被爆者たちとハグし、彼らも晴れやかな表情を見せたという嬉しい話の裏には、原発事故による健康被害で苦しむアメリカ人兵士たちがいる。こうした事実を皆さんに知ってほしいと思い、こんな話をしました。

米軍元兵士を救済するための支援組織が発足したら、金額はともかく協力したいと思います。核、原発は自国民のみならず、外国の人も、全人類を不幸にするつもりです。これはオバマさんや小泉さんのメッセージで分かると思います。これからの人類の方向としては、核なき世界を実現できるかどうか、私が生きている間にできるかどうかは分かりませんが、諦めずに正しい方向を全員が目指す。そうすれば政治家だって、国民の声は無視できませんから、無視したら落選しますから、絶対に変ります。

塾生の一言

- …今までは開催日に出席するだけで満足していたが、塾長や事務局の負担、塾の運営までに心が至らなかった。できることからまず、始めたい。トモダチ作戦は知っていたが、あれほどまでに被曝していたとは。皆で声を上げ、救えることができればいい。
- …志村先生が言う「少年のような好奇心」をもって生きたいと思う。武士の源が律令制度から逃げ出した農民であり、自分の土地所有を認めてくれる人に対しては、恥ずかしい行為をしてはならない意識に発展したとの司馬さんの指摘は新鮮だった。「恥」の文化を忘れるから、舛添さんのような人が出てくる。
- …志村先生の新月に木を切れば、その木は腐らないという時間生物学。解明できることを楽しみにしています。「ロナルドレーガン」訴訟を初めて知り、被ばくした方々救済に少しでも役に立ちたい。
- …オバマさんの広島訪問をテレビで見、あらためて福島原発の事故による被害を原爆被爆と重ね合わせました。原発再稼働を目指す政府には怒りを感じました。

今後の日程案内



下村塾長のネットワークによって、

- 「生き方塾」の開催日程、ゲストが続々決まっています。メモして予定を組んでください。
 - ・6月は6月25日、東京・高田馬場IZUNOME TOKYOで応援団講義は元島栖二先生
 - ・7月は7月30日、二本松男女共生センターで、応援団講義は元朝日新聞編集委員の早野透さん。憲法問題について話します。
 - ・9月は9月24日、東京・高田馬場IZUNOME TOKYOで応援団は、ニューヨークで活躍する世界的なジャズピアニストで、ジャズ界の大御所・秋吉敏子さんです。
 - ・10月は10月22日、二本松男女共生センター[予定]で、応援団講義は中原儀子先生
 - ・11月は11月19日、東京・高田馬場IZUNOME TOKYOで応援団講義は世界的にも有名な照明デザイナーの石井幹子さんです。
- これらの方々のほかに、鳩山友紀夫元首相、元三菱東京UFJ銀行会長の畔柳信雄さんと交渉中です。